



## Contents

- P. 1 有明海研究プロジェクト最終成果報告会の開催
- P. 2 ASEAN Research Based Education Seminar and Collaborative Lecture Program on Lowland Technologyの開催
- P. 3 ミニサイエンス集会開催報告

### 有明海研究プロジェクト 「有明海における環境変化の解明と予測」 最終成果報告会 開催

平成22年度から行ってきた「有明海における環境変化の解明と予測」プロジェクトの最終成果報告会を開催いたします。

2000年のノリの色落ちを契機として社会問題にまで発展した、「有明海異変問題」は、いまだ、その原因解明に至っていません。その理由の一つは、過去のデータの欠如にあります。異変問題の多くは、諫早湾干拓事業との関連が疑われていますが、潮受堤防建設以前のデータが不足しているために干拓事業の影響がどれほどであったかはっきりしない部分が多いのです。また、並行して、有明海の環境再生に向けた合意形成の方法あるいは望ましい有明海環境はどのようなものか、検討する必要があります。そのために、本プロジェクトでは、次の4つのテーマを設けて、研究を進めてきました。

- 1) 数値モデルによって、諫早湾潮受堤防の開門調査が行われた場合のシミュレーションを行い、開門の効果を検証する。
- 2) 有明海の生態系モニタリングを行い、数値モデルの高度化に反映させるとともに、生態系変動機構を明らかにしようとする。
- 3) 現況再現精度の高い生態系シミュレーションを構築し、過去30年程度の環境変化を再現する。この数値シミュレーションと過去データの解析によって、有明海の環境変化の実態を明らかにするとともにその原因を検討する。
- 4) ノリ漁業者の経営構造の変化、諫早湾干拓事業の決定過程の解明、コモンズとしての有明海の展望などの人文・社会学的研究を進める。また、他のテーマも含めて得られた研究成果を、公開講座、ワークショップを通じて市民、行政に分かり易く還元し、対話を進める。



本報告会では、これまでの成果を口頭およびポスターの形式で発表し、最後にわずかな時間ではありますが、有明海異変問題の解決のための方策、来る諫早湾潮受け堤防の開門調査にむけて行うべきことなどについて、討論を行う予定です。当日のスケジュールは以下の通りです。年度末の最後の休日ではありますが、多くの皆様のご参加をお待ちしています。

### 最終成果報告会プログラム

- 13:00 挨拶
- 13:10 諫早湾潮受け堤水門開門による環境変化  
濱田孝治
- 13:40 有明海奥部の底泥栄養塩、底生生物、植物プランクトンの動態について  
片野俊也
- 14:10 休憩
- 14:30 夏季を中心にした有明海の環境変動機構について  
速水祐一
- 15:00 リスクをめぐる紛争ー「合意」から「意味ある応答」そして「理解」へ  
樫澤秀木
- 15:30 総合討論
- 16:20 閉会の辞

- 【日時】 2013年3月31日（日）13時～16時半
- 【場所】 佐賀大学・理工学部6号館1階
- 【主催】 佐賀大学低平地沿岸海域研究センター
- 【お問合せ】 佐賀大学低平地沿岸海域研究センター事務局  
TEL：0952-28-8846  
E-mail：medusae@cc.saga-u.ac.jp（藤井直紀）

## ASEAN Research Based Education Seminar and Collaborative Lecture Program on Lowland Technologyの開催

去る3/11（月）から3/18（月）にかけて、ASEAN Research Based Education Seminar and Collaborative Lecture Program on Lowland Technologyと題し、ASEAN諸国の大学および本学に在籍する若手研究者、ならびに同大学群における大学院博士後期課程・前期課程学生に向けたセミナーおよび集中講義を開催しました。同プログラムは、本学の大学院工学系研究科都市工学専攻における都市工学考究Ⅱの科目にも位置付けられ、無事に参加を果たした博士前期課程学生には2単位が交付される仕組みも整えました。かつ同プログラムは、少なくとも本学の各センターもしくは大学院工学系研究科においては初のシステムの構築ならびに実施でもあり、画期的な教育研究プログラムともいえます。



講義の様子

今回は、低平地沿岸海域研究センター、本学の大学院工学系研究科都市工学専攻、あるいは国際低平地研究協会（IALT）を通じて20年以上に及ぶ教育・研究交流を続けており、近く当センター・ILMRサテライトを締結予定のインドネシア・ハサヌディン大学、タイ・カセサート大学ならびにベトナム・水資源大学の3大学との連携を図ることで、上記のプログラム実現の運びとなりました。各大学から1～2名の講師を、一部には本学の大学院工学系研究科における非常勤講師職も付加して招へいするとともに、3名～8名の若手研究者ならびに学生を帯同していただき、来佐していただきました。

同プログラムは、特別講義、特別セミナー、現地視察、実験・実習、総合討議の内容に加え、Research Based Educationと新たに呼ぶ、つまり教育と研究を数珠繋ぎしたプログラムを設けたことが特徴です。学問と社会との連携に迷いが生じることが少なくないのと同様に、教育と研究の間でも同じ混乱が認められます。特別講義や特別セミナー等で得られた数々の知見が自身の研究にどう活かされるかの即日実践を盛り込んだため、期間中は連日朝から夕方にかけて、さもすれば夜にかけて、同プログラムは進められました。実施者・参加者ともども、後半に至るほど疲労困憊の体を隠せませんでした。最終日の工学系研究科長による受講証授与式では、顔ぶれは皆とても晴れやかでした。まさに100%以上の充実度が確信された瞬間でした。

「Lowland Technology」とくられる分野においては、まず既往の異なる分野が集うことで認められる論理の矛盾は一切許されません。ある分野ではこうと目される論理が他の分野ではあっさりと否定されてしまう、この折に新たな課題の抽出と解決のスタートとなります。ゆえに、「Lowland Technology」の分野に携わろうとすれば、一層のタフさと孤独さの克服も求められるといえます。かくして醸成される知見にはおのずと哲学も加味されることになり、結果として地域・社会・国際の各貢献に無難に繋がっていくものと信じられます。

末筆となりましたが、この度のプログラムの実施に際し、本学の大学院工学系研究科都市工学専攻、同国際交流推進センター、同工学系研究科、同学術研究協力部国際課ならびに研究協力課の関係各位を始め、同プログラムの実施に携わっていただいた関係各位に記して感謝の意を表します。

（荒木宏之・日野剛徳・三島悠一郎・S. Manandhar・A. K. T. Dundu）



有明海沿岸道路の視察



実習（コアサンプルの観察）の様子



演習結果のグループ討議



## ミニサイエンス集会「冬の珪藻を語る」開催報告

3月23日土曜日、午前10時より アバンセ4階研修室にて、一般市民を対象とする、研究集会を開催しました。昨年2月末から発生した珪藻赤潮の発達過程を中心に、珪藻の増え方などについて、解説をしました。また、会場には、顕微鏡を持ち込み、珪藻の観察もしてもらいました。残念ながら、参加者は決して多くはありませんでした。しかし、少人数であったので、その分、参加された殆どの方から、質問を受けることが出来ました。一つ一つの質問に対して、十分に時間をかけて話のできたので、理解を深めて頂けたのではないかと思います。発表する立場としても一方的な講義とは違って、一般の方の考えを伺うこともできたので有意義なものとなりました。機会があれば、また開催したいと思います。（片野）

## スタッフの離任

これまで、低平地沿岸海域研究センターを支えてくださった4名の研究員が新しい職場に異動されます。手塚公裕氏は日本大学工学部へ、伊藤祐二氏は鹿児島大学農学部へ、Adi Nugraha氏は東京海洋大学海洋科学部へ、木梨真知子氏は群馬工業高等専門学校へ、それぞれ、異動されます。新天地でのより一層のご活躍をお祈りいたします。



### 編集後記

2010年に始まった、有明海研究プロジェクトは、あっという間に終わってしまいました。開始当初は、いろいろな調査・研究をしようと意気込んでいましたが、ばたばた、もがいているうちに終わってしまった気がします。来年度は、いよいよ諫早湾開門調査の開始期限を迎えます。なんとか、開門影響をきちんと評価し、客観的なデータを提供したいとおもっています。（片野）

編集担当：片野

### 発行・編集

佐賀大学低平地沿岸海域研究センター  
〒840-8502 佐賀市本庄町1番地  
TEL 0952-28-8582 0952-28-8846  
FAX 0952-28-8189 0952-28-8846  
ホームページ <http://ilt.saga-u.ac.jp>

(平成25年3月27日発行)